

# 16-17世紀ローマの公共噴水の用と美

神山 藍<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 東洋大学 (〒350-8585 埼玉県川越市鯨井2100, E-mail:kamiyama@toyo.jp)

本研究では、16～17世紀のローマ水道復興と同時期の建設されたローマ市内の公共噴水に着目し、(実)用と美としての噴水を、基本構成である吐水口と水盤の構成と配置および制度の視点から明らかにした。その結果、対象の噴水の9割の噴水が水汲みに即し、6割以上の噴水において飲水としての取水が可能であった。また、この時代の制度には「水を邸宅に引き込む代わりに、自費で公共のための噴水を建設する義務」があり、この制度が装飾的でありながらも、実用性のある噴水制作を支えたと言える。

キーワード: 噴水, 実用, 装飾, 用と美, ローマ

## 1. 研究の背景と目的

ローマ市内には大小合わせて2000基の泉<sup>[1]</sup> (fountain)がある<sup>1)</sup>。その起源は、古代ローマ時代まで遡り、紀元1世紀末のSextus Julius Frontinus (以下、フロンティヌス)著『De aquaeductu』『水道書』によれば、その当時39の装飾噴水 (munera), 591の水汲み場 (lacus) が公共用噴水として設置された<sup>2)</sup>。476年西ローマ帝国滅亡までにローマには11本の水道が建設されるが、帝国の衰退とともに、ローマ水道は漸次失われ、同時に古代ローマ時代の噴水も失われ、当時の原形をとどめる噴水は無いに等しい。

ところが、ローマ水道は約千年後の15世紀に転機を迎える。古代水道に関するフロンティヌスの『水道書』と古代水道および建築の「強 (firmitas), 用 (utilitas), 美 (venustas)」の重要性を説いたMarcus Vitruvius Pollio (以下、ウィトルウィウス)のDe Architectura『建築書』の写本が発見されたこともあり、3本の古代ローマ水道が修復された。まず、1453年にローマ教皇ニコラウス5世により古代ローマのヴェルジーネ水道が修復され、これを聖ピウス5世が1570年にヴィルゴ水道として復興した。続いて、1585年に教皇シクストゥス5世のもとフェリーチェ水道、1612年に教皇パウルス5世によってパオラ水道が完成した<sup>3)</sup>。これにより、ローマ市内の噴水が再整備された。一般にルネサンス期以降に造られた噴水は、旧来の噴水と比較して装飾的であり、噴水芸術と呼ばれるように、美を希求する景物と認識される傾向にあるが、この時代の公共噴水は、非実用的な景物ではなく、飲料、洗濯用、防火、広場の洗浄、家畜の飲料<sup>4)</sup>などの利用を目的とする市民生活に欠かせない公共施設で

もあった。そして、驚くべきことに、現代でも一部の装飾噴水 (Fontana Artistica) は、公共広場や通りを飾るだけでなく、飲水としての実用的役割を果たしている。ここに、ローマの泉の魅力がある。

そこで、本研究ではローマ水道復興と同時期の16～17世紀に造られたローマ市内の公共噴水に着目し、(実)用と美としての噴水を、基本構成である吐水口と水盤の構成と配置および制度の視点から明らかにする。

### (1) 既往研究

これまでのローマ市における噴水研究として、噴水史<sup>5),6)</sup>、庭園史<sup>7)</sup>の見地からの歴史研究蓄積があり、特定の噴水<sup>8)</sup>やジャコモ・デッラ・ポルタ<sup>9)</sup>やジャン・ロレンツォ・ベルニーニ<sup>10)</sup>のような有名建築家に着目した研究は数多くある。特に、その芸術性や装飾性についての研究は数に限りがない。また、公共としての噴水に関しては、広場空間や都市景観<sup>11)</sup>としての研究蓄積は豊富にあるが、噴水の実用的価値と装飾的価値、つまり用と美の両者について言及した研究は希少である。

## 2. 研究の方法

本研究では、ローマ水道が復興した16～17世紀に制作された公共噴水を研究対象とし、実測、絵図、文献資料からその実用性と装飾性について明らかにする。

### (1) 噴水面集資料について

本研究では、Giovanni Battista Falda (1643-1678) (以下、ファルダ)による『Le fontane di Roma』(以下、ローマの

泉)を基調とする。1691年<sup>[2]</sup>に発行された版画集「ローマの泉」は、4部構成であり、その第1部はローマの広場や街路にある公共空間にある噴水で構成される。本研究では、公共噴水を研究の対象とすることから、この第一部に掲載される31枚29種<sup>[3]</sup>の噴水を研究対象とする(資料記号:a)。

本研究は、噴水の歴史の変遷を探ることを目的としなが、例えば、古代ローマ帝国時代に大規模浴場で使用されていた貴重な浴槽が噴水の水盤として転用され、噴水の設置場所や装飾なども変更や修復などは頻繁に行われる。従って、ファルダの「ローマの泉」に加え、以下に示す5画集を参考資料から、噴水の大まかな変化をたどる。文中の噴水名称については、ファルダの版画集「ローマの泉」の頁番号[No]にて表記し、必要に応じ版画タイトルにある広場名または噴水名を用いて呼称表記する(表-1)。

ルネサンス後期のローマの噴水に関する資料は多くあるが、なかでも、体系的にまとめられ、かつファルダより古い資料としては、1647年出版のDomenico Parasacchiらによって描かれた43枚<sup>[4]</sup>の版画集『Raccolta delle principali fontane dell'inclita città di Roma<sup>[2]</sup>』がある[資料記号:b]。版画集は噴水の名前と噴水のみ記載であるが、建設当時に近い噴水の姿を知ることができる。

ファルダとはほぼ同時期の1690年に発行されたイタリアの彫刻家Triburio Vergelli(1555-1610)による29枚の版画<sup>[5]</sup>によって、ファルダの写実性を確認することができる[資料記号:c]。また、時代は異なるが、噴水だけでなく噴水を利用する人物などが細かく描かれた資料として、ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ(1720-1778)の版画を用いる[資料記号:d]。

以上の資料からでは、噴水の平面や立面形状などが正確に把握できないことがあるため、Giovanni Battista Cipriani(1766-1839)による1817年発行の建築ガイドブック『Architecture of Rome<sup>[6]</sup>』と『Degli edificj antichi e moderni di Roma<sup>[7]</sup>』[資料記号:e]、および1840年に発行されたフランスの建築家、地図学者Paul Letarouilly(1795-1855)(ポール・マリー・ルタルイー)の建築図面集『ローマ近代建築<sup>[8]</sup>』と『The Vatican and Saint Peter's Basilica of Rome<sup>[9]</sup>』を参考資料とする[資料記号:f]。

以上の資料[a~f]の6資料より、噴水の利用形態を明らかにする(表-1)。なお、[No.11, 12]と[No.19, 20]は同噴水の版画であり、[No.13, 29]は現存しない。[No. 4, 5, 27]は私邸により立入り不許可のため、実測の対象外とする。

## (2) 噴水の基本構成

ローマには、古代の噴水が残されていないことから、

79年に火山の噴火によって埋没したイタリア南部の古代都市から発掘されたポンペイの泉から公共噴水の基本構成を探る。ポンペイの泉は、街角や道端に設置され、図-1のように基本的に吐水口(流水口)と水盤(水受け)によって構成されるが、飲用としての水を吐水口から、雑用としての水を水盤から取水する複数の用途に合う噴水構成である。

表-1 噴水名称と参考資料

[No]	版画タイトル	呼称	資料記号
3	fontane di piazza san pietro	サンピエトロ広場	abc,def
4	fontana del gran cortile del palazzo vaticano	バルヴェデーレ宮殿中庭	abc
5	fontana del palazzo vaticano	ヴァチカン宮殿	abc,ce
6	fontana di piazza di monte cavallo	モンテ・カヴァッロ広場	abc,de
7	fontana di diana alle quattro fontane	4つの噴水	ae
8	mostra dell'acqua felice	ヴィミナーレ山の噴水	abc,def
9	fontana nella piazza della basilica di sant' maria maggiore	サンタ・マリア・マッジョーレ広場	abc,def
10	fontana nella piazza di s. giovanni in laterano sotto la guglia	聖ヨハネ広場	abc,ef
11	veduta della fontana dell'acqua paola	アクア・パオラの噴水(1)	abc,def
12	altra veduta della fontane e castello dell'acqua paola	アクア・パオラの噴水(2)	同上
13	fontana sul monte gianicolo	サンピエトロ イン モントリオ	abc(e),f
14	fontana su la piazza della porta del popolo sotto la guglia	ポポロ広場	abc,def
15	fontana della piazza della trinita dei monti	トリニタ デ モンティ広場の噴水	abc,de
16	fontana del sig. principe di palestina	バルベリーニ広場	abc,ef
17	fontana del campidoglio	カンピドリーオ広場	abc,def
18	fontana nella piazza dei ss muti sotto campidoglio	カンピドリーオ下広場	abc,ce
19	fontana in piazza navona	ナヴォーナ広場(1)	abc,def
20	altra veduta fontana in piazza navona	ナヴォーナ広場(2)	同上
21	fontana in piazza navona	ナヴォーナ広場(3)モロ	abc,def
22	fontana a ponte sisto in capo strada gigulia	シスト橋	abc,ce
23	fontana su la piazza de ss mattei	マッテイ広場	ac,f
24	fontana in piazza colonna	コロナ広場	ac,de
25	fontana nella piazza della rotonda	ロタンダ広場	abc,de
26	fontana su la piazza famese del ser.s.duca di parma	ファルネーゼ広場	abc,df
27	fontana nel cortile del palazzo del sig. duca di bracciano	ブラッチャーノ侯爵邸中庭	ac,e
28	fontana in piazza giudea	ジューデア広場	abc
29	fontana a monte citorio	モンテシトリオ広場	ac,(d),(e)
30	fontana nella piazza di s. gianicomo scossacavallo	スコッサカヴァッリ広場	abc
31	fontana su la piazza della madonna dei monti	マドンナ・デイ・モンティ広場	abc,f
32	fontana nella piazza della basilica di sant' maria in transtevere	マリア イン トランステヴェレ広場	bc
33	fontana celebre d'acqua acetosa	アセトーサの泉	ce

### (a) 吐水口について(飲水としての利用)

古代ローマの噴水には、素朴な噴水<sup>[5]</sup>であってもその流水口には、必ずと言ってよいほど「仮面」

(mascherone)と呼ばれる装飾が施され、特定の動物や人の顔のレリーフが付けられ、それらの口から水が流れる仕組みとなっている(図-2)。これは、一種の魔除けとされ<sup>18)</sup>、例えば、泉の神であるシレノス<sup>19)</sup>は泉を守護すると考えられ、ポンペイでは、シレノスの仮面が噴水と一緒に祀られる。この仮面から流れる水は、通常飲水として使用され、この装飾は16-17世紀の噴水にも慣習として残ることから、本研究では、仮面[M]からの流水のみを飲水の吐水口とする。

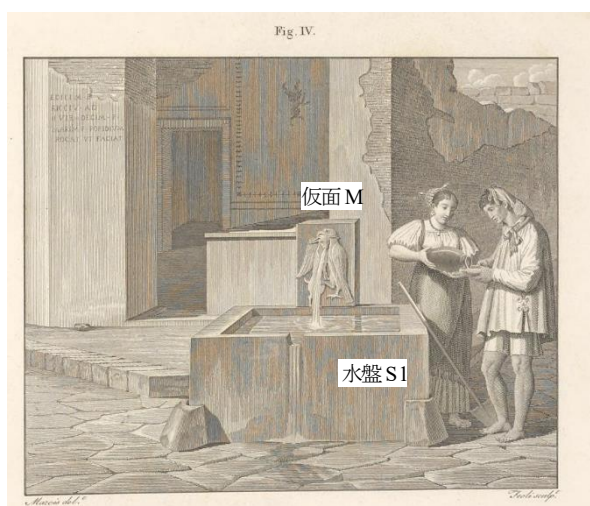


図-1 ポンペイの噴水利用形態  
Les ruines de Pompéi / par F. Mazois より転載<sup>20)</sup>

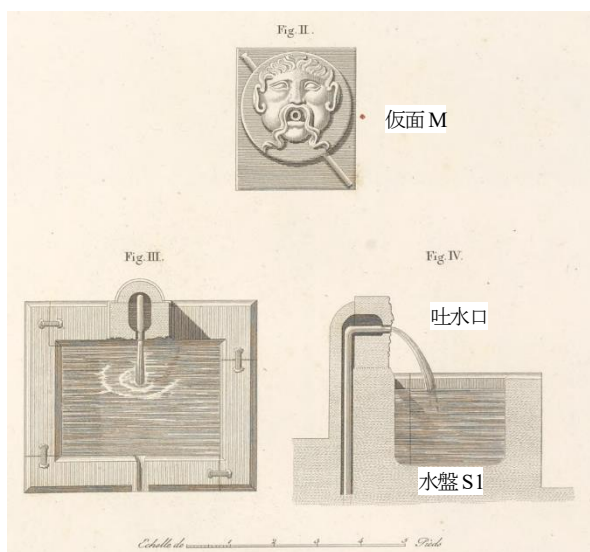


図-2 ポンペイの噴水デザイン  
Les ruines de Pompéi / par F. Mazois<sup>20)</sup>より転載

### (b) 水盤について(雑水として利用)

噴水に使用される、凹状の水受けは、元々円形であっても方形であっても labrum と称され、本研究ではこれを「水盤」と称する。

16-17世紀頃の噴水は、図-3のように水盤が垂直方向に幾重にも重ねられことがある。これは、空気の浄化や

衛生のために役に立つとされるが<sup>22)</sup>、本研究では、水汲みが可能な水盤を地盤面から最も近い水盤とし、これを分析対象とする。便宜上、地盤面より低い位置に水を貯める水盤・水受けを S-0、地盤面より高い位置にある水盤を「水盤」(S-1)とする。前掲の『水道書』には、「公共噴水が昼夜を問わず民衆に使用されるよう、可能な限り間断なく放水続けるように努力すべきものとする<sup>23)</sup>」と記され、「これは貯水槽から必然的にあふれ出る、相当量の水は、わがローマ市の衛生に役立つばかりか、下水溝の洗浄のためにも必要だからである<sup>24)</sup>」という理由から、基本的にローマの噴水は、S-1やS-0の水盤から常に水が溢れ出る(図-3)。

### (3) 水盤へのアクセス

現存する噴水かつ測定可能な水盤(26基)については、地盤面から水盤縁の天端の高さを実測する。人間が普通に立ち、凹型の器から何かを手取る場合の器の高さの最高値は H=1250mm とされ、背伸びをした場合 H=1300mm まで手が届くとされる<sup>25)</sup>。従って、図-1のように水盤から水汲みをする場合、水盤の縁の高さは、1250mm 以内が妥当な高さと言える。また、一般に洗面台の洗面器の底の高さは 720mm が適当とされ、H=560-820mm までの基準値<sup>26)</sup>が認められる。一方、風呂場での湯を汲み出す場合の浴槽縁は、膝より低く、H=200-250mm が適当とされる<sup>27)</sup>。以上の基準値を、噴水の公共利用における値の目安とする。

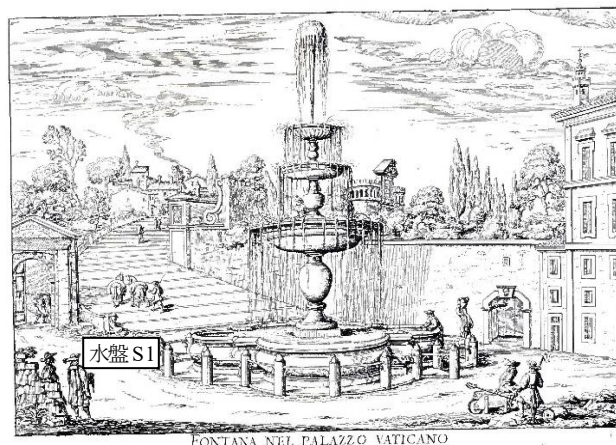


図-3 水盤から水汲みをする人 [No.5資料a]

### 3. ローマにおける公共噴水の実用性

ウィトルウィウスが「水は、実に、飲料を提供するだけでなく、用に供して無限の要求に応じ、ありがたい無償の使い途を提供する<sup>28)</sup>」と述べるように、噴水にも様々な用途があるが、以下では、人々が噴水から水を汲む用途に限定し、この用途を(1)飲用としての水汲み

(2) 雑用としての水汲みの2つの観点から噴水の実用性を探る。

(1) 飲用水としての水汲み (吐水口へのアクセス)

対象とする29基の噴水のうち吐水口に仮面[M]が設置される噴水は19基あり、6割以上の噴水において飲用としての利用が可能であったと言える。

仮面[M]の種類については、ライオンや人の顔のように古代の様式に従った仮面もあるが、16世紀以降はギリシャ神の使いであり、キリスト教の救済と復活の象徴であるイルカや貝などを模った仮面、そして、ライオン、ドラゴン(鷲)、蜂、丘など歴代ローマ教皇の紋章<sup>6)</sup>が仮面のモチーフに使用される変化およびレリーフがより立体的になる。

(2) 雑用水としての水汲み (水盤へのアクセス)

実測が可能な20基の噴水のうち、水盤の高さを実測すると、水盤平均高さは900mmであり、2基以外は水盤[S-1]高さが1250mm以内であり、9割の水盤において人間の水汲みに適した高さに水盤が設置されていると言える。また、地盤面にある水盤[S-0]4基のうち、基壇の変更と設置場所の移動がある1基を除外すると250mm以内であり、水汲みに適した高さと言える。

吐水口の水は、ポンペイの噴水のように水盤[S-1]で受け、一時的に水を貯めることを基本とするが(図-1)、水圧などの条件によっては、低い位置にある水盤[S-0]や吐水口専用の水盤[SS]や独立した別の噴水[F2]を設けることがある。以下では、吐水口と水盤の基本構成から水盤の活用を示す。

(a) 水盤[S-1]の活用

地盤面から最も低い水盤[S-1]が吐水口の受けになっている噴水は15基あり、7割以上を占める(図-4)。水盤の平均高さは約980mmで、ロタンダ広場[No.25]を除いた全ての水盤で1250mm以下であった。素朴でわかりやすい噴水の基本型であり、図-5のように、水盤は、家畜の水飲み場としての利用も可能であり、道端に設置される壁龕型の噴水のほとんどはこの類である。

(b) 水盤・水受け[S-0]の活用

一方、水面が地盤面あるいは地盤面より下に位置する水盤・水受けを便宜上S-0とすると、水盤S-0が吐水口の水受けになっている噴水が4基ある。スペイン階段下にあるバルカッチャの泉やアセトーサの泉など水圧が低い場合は、掘り下げた地盤面に水盤が置かれる(図-6)。水盤が地盤面より下に設けられる場合でもその上に設置されるS1水盤の吐水口から飲水を得る場合は、S0水盤に、板石状の足場を設けて、水汲みを可能にする工夫が見られる(図-6)<sup>2)</sup>。

一方、ロタンダ広場の噴水のように水盤(S-1)の縁

の天端が1300mmと基準値より高い場合は、基壇に踏み台のような足場が置くことによって、高さを調整し、人々に吐水口から飲水を提供する工夫がある(図-7)。

(c) 水盤S-1に設置される小水盤[SS]の活用

図-8のように、水盤[S-1]上に小さい水盤[SS]が設置される噴水が2基認められる。どちらも吐水口には仮面が付けられていることから、主要な水盤[S-1]に小型の水盤[SS]を設け区別することがある(図-8)。

(d) 水盤の傍らに設置される独立した噴水[F2]の活用

吐水口と水盤を一揃いの噴水F-1とすると、もう一組の別の噴水F-2が設置されている噴水が4基確認できる。図-9のように噴水基壇下の柵の外に設置されることから(図-10)、市民が自由に取水することができる工夫がある。このような水盤構成はローマで頻繁にみられる。

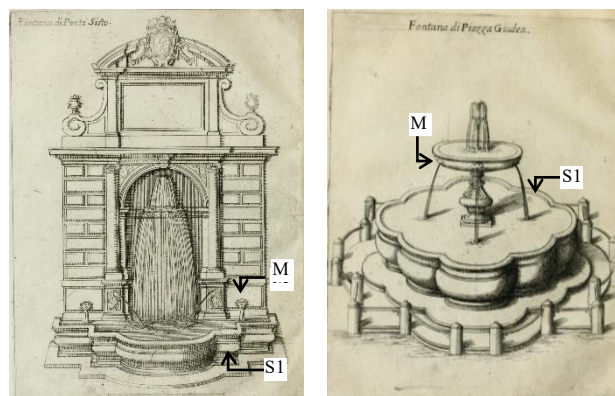


図-4 噴水の吐水口 [No.2 (左), No.28 (右) 資料 b]



図-5 「4つの噴水」に設置される柵と水を飲む馬 [No.7 資料 aの一部]

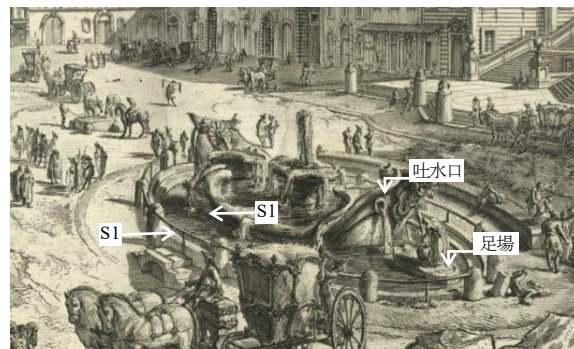


図-6 Piazza di Spagna, fontana del Bemini detta "La Barcaccia" [No.15 資料 dの一部]

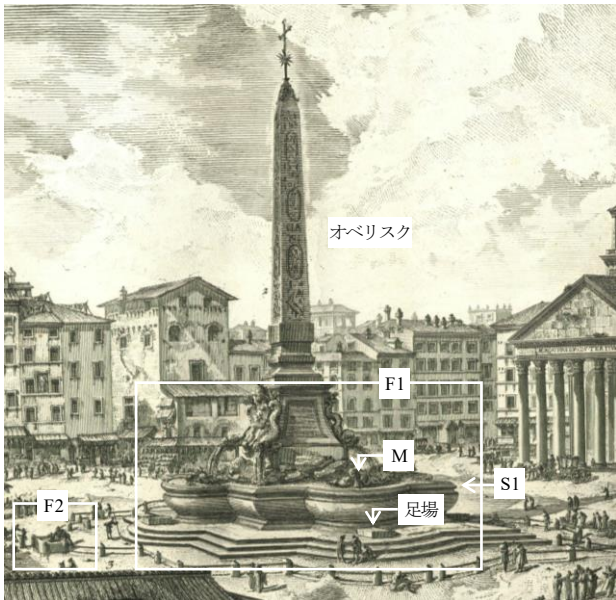


図-7 ロタンダ広場の泉(No.15資料dの一部)

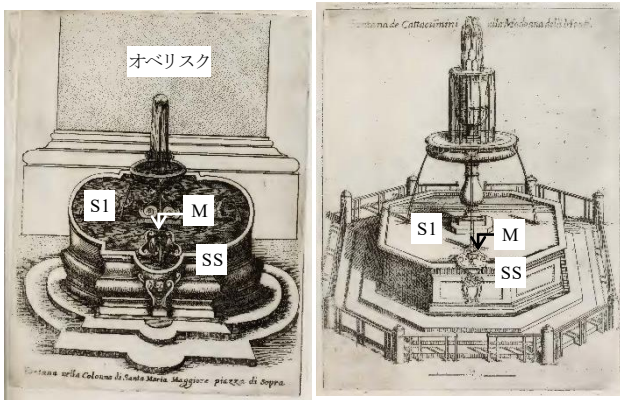


図-8 小型の水盤(SS)が設置される噴水 (No. 9, No. 31)

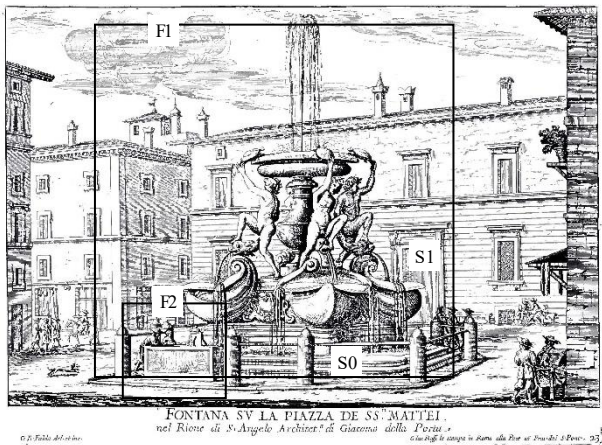


図-9 マッティ広場のカメの泉にある方形の水汲み場 [No.23資料a]

(e) 広場内の独立した噴水 [F2] の活用

前述 (3) の噴水 [F2] は、噴水設計当初から一緒に設置されることが絵図から読み取れる。これとは別に、主となる噴水 [F-1] 設置に前後して、水汲み用の噴水 [F-2] を設置することがある (図-11)。

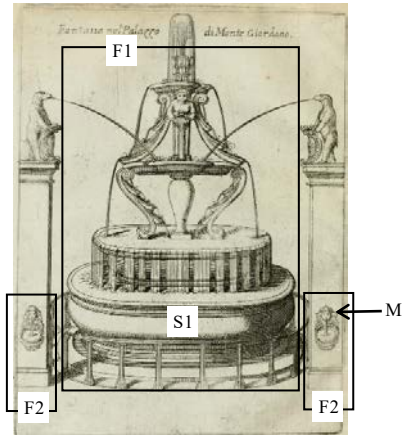


図-10 ブラッチャーノ侯爵邸中庭の泉 [No.27資料b]

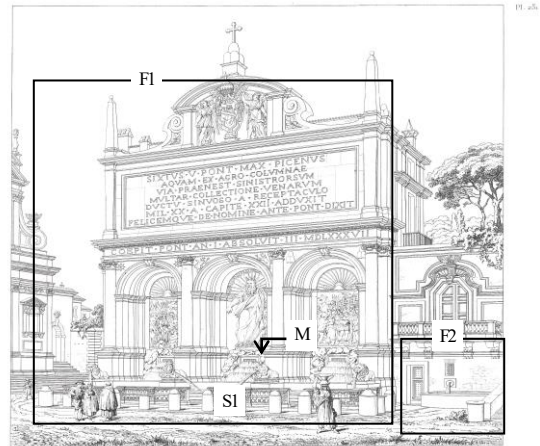


図-11 壁龕型の噴水例 Mostra dell'acqua felice [No. 8資料f]

このような噴水が置かれる例は8カ所の広場で確認できる。このうちの4基は、吐水口のない噴水のある広場にある。バルベリーニ広場にあるトリトンの泉のように噴水 [F1] に吐水口がない場合、[F2] を設け、これを補完する役目を果たすと言える。トリトンの泉 [No.16] は、この類の好例であるが、次章で詳述する。

また、噴水 [F2] は、広場内にあるオベリスクの台座に設置される例も数多い。市内にある12本のオベリスクのうち10本の足元に噴水があり、図-7のように装飾噴水 [F1] の水盤 [S1] の中央に配される場合と、装飾噴水のある広場に独立して F2 噴水として設置される場合がある (図-12)。後者の場合、6本<sup>[7]</sup>のオベリスクに角型の水汲みを目的とする噴水が設けられている。サンタ・マリア・マッジョーレ広場のように、噴水自体 [F1] にも水飲み利用 [SS] が認められ (図-12 右)、さらにオベリスクの台座に水飲み・水汲みが可能な別の噴水 [F2] が設置されることもある (図-12 左)。

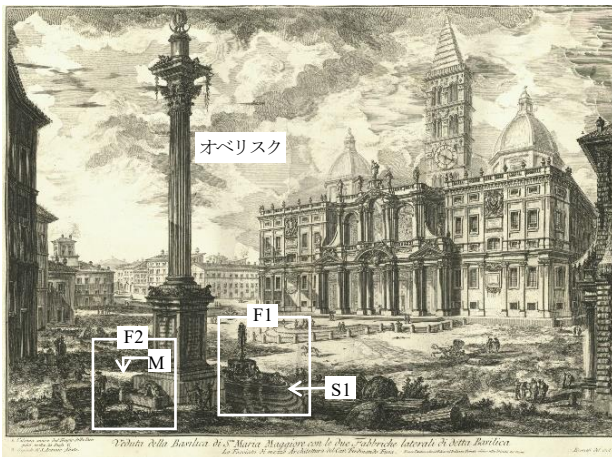


図-12 サンタ・マリア・マッジョーレ広場のオベリスクと水汲み場 [No.9資料 d]

### 3. 教皇による公共用噴水の装飾性

2章では、ローマの公共噴水の実用性を吐水口と水盤の構成と配置から明らかにした。3章では、制度に着目し、用と美を兼ね備える噴水制作に至った事例を紹介する。

古代ローマでは、用途別の給水塔が設けられ、1) 皇帝用（コロッセオ、カラカラ浴場など）、2) 個人用（一般家庭および個人共同の業務用）、3) 公共用の3種に分割された。さらに3)の公共用には、兵営用、公共建造物用、装飾噴水用、水汲み場用に別れた<sup>30</sup>。このころ、39の装飾噴水（munera）と591の水汲み場（lacus）が公共用噴水として設置された<sup>31</sup>。『建築書』によれば、「中央の槽にはあらゆる貯水池と噴水へ、他の槽からは市民から税が毎年とれるように浴場へ、第三槽からは公共用に不足を来たさないようにして私人の邸宅へ<sup>32</sup>」とされる。つまり、公共用以外の水道から税を取る仕組みとなっていたと言える。さらに古代の水道関係の法規第105節には「個人用に水をひくことを望むものは、誰でもまず許可を得て、皇帝からの書状を水道長官に提出せねばならない<sup>33</sup>」とし、この制度は、16世紀以降も教皇が皇帝に代わり踏襲された。

従って、16世紀になり、教皇によって3本の噴水が復興され、ローマ市内には豊かな水が供給され、上記の法に従い、水道の一部は、貴族の邸宅に給水されることもあったが、各家庭に給水されることはなく、ほとんどのローマ市民は、公共の噴水から取水する必要があり、このため、水を運ぶ習慣は1840年頃まで続いた<sup>34</sup>。

1570年以降、時の教皇は、教皇庁の公金によって公共の広場や街路に噴水建設に努めた。一方、貴族、聖職者、裕福な商人などの特権階級が、個人の邸宅に水を引入れるために邸宅前広場に建造された噴水も多かった。前述

のとおり、私人の邸宅に水道管を敷設する場合、まず教皇の許可を経る必要があった。これに加え、16世紀の制度では、水を邸宅に引き込む代わりに、自費で公共のための噴水を建設する義務、自費で公共水道に排水する義務、噴水を維持する義務<sup>35</sup>を課すという興味深い制度となった。例えば、ファルネーゼ宮前広場 [No.26]、マッティ宮殿前広場 [No.23]（図-11）、バルベリーニ宮殿広場前 [No.16]（図-13）、パンフィーリ宮前 [No.21]（図-8）、モンテチトーリオ宮殿広場 [No.29]などの噴水は、有力貴族がこの制度を利用して制作した噴水である。

フェリーチェ水道やパオラ水道のモストラ（最末端に設けられる記念碑的な噴水）などは公共の装飾噴水と言えるが、いわゆる噴水芸術と呼ばれるような他に類をみない噴水は、有力貴族の邸宅前に建てられた、言わば半官半民の噴水である。権力者が利益と名誉を希求する悪弊が結果的に、市民が自由に使用できる実用性と貴族の宮殿を象徴する装飾性を兼ねた噴水制作に貢献した。その中でも、特に顕著であったのが、時の教皇の邸宅前に設えられた噴水である。そこで、以下では、教皇の在位中に自身の邸宅前に制作された噴水の実用性と装飾性を紹介する。

#### (1) 教皇ウルバヌス8世によって建設された装飾噴水

バルベリーニ家出身のウルバノ8世（在位1623-1644）によって建設された噴水には、バルカッチャ [No.15, 図-15] とトリトンの泉 [No.16] がある。どちらもジャン・ロレンツォ・ベルニーニ（1589-1680）によって制作された噴水とされ、バルベリーニ家の紋章である、太陽と蜂の紋章が付けられている。

バルベリーニ宮殿前にあるバルベリーニ広場には、通称「トリトンの泉」と「蜂の泉」として知られる2基の噴水がある（図-13）。1643年トリトンの泉は、水盤の高さから水汲みは可能であるが、取水口がない。このため、市民が不満を訴えたため、その1年後の1644年に広場の片隅に小型の噴水がベルニーニによって制作された（図-13）。新たに設けられた貝殻を模した小型の噴水にはバルベリーニの紋章である3匹の蜂が吐水口になっているため、通称「蜂の噴水」と呼ばれる。噴水には、碑文があり、「教皇ウルバヌス8世は、市の公共の装飾用（ad publicum Urbis ornatum）に噴水を建設したが、教皇就任21日目となる1644年に、別途この噴水を市民の使用（singulorum utilitati）のために作らせた<sup>[8]</sup>」ことが記される。この装飾用噴水が、トリトンの泉であり、一般市民の使用のために後に設置された噴水が蜂の泉とされる。このように、バルベリーニ広場のように、市民が取水できる吐水口がない噴水の場合、水汲みが可能な噴水

を別に設置することが求められた。たとえ市民の使用のために制作された噴水でも、貝や蜂などの装飾が施された。このように、私人の邸宅前に設けられた噴水であっても、実用性と装飾性を兼ねた噴水が提供された。

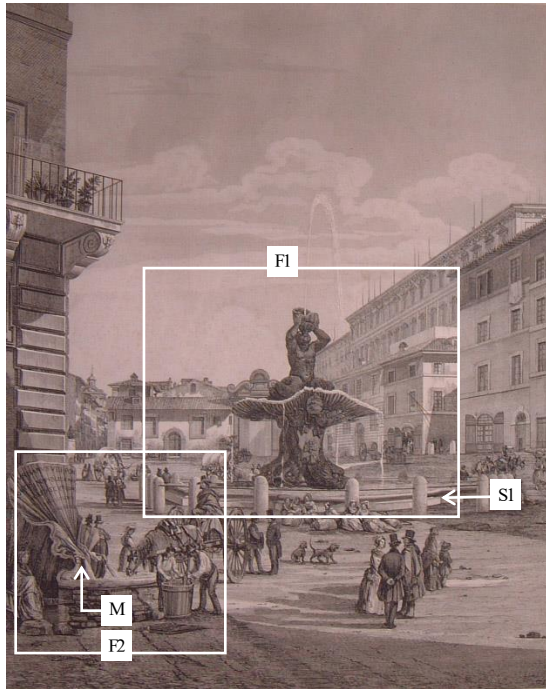


図-13 バルベリーニ広場のトリトンの泉と蜂の泉 [No.16]  
Luigi Rossini, View of the Piazza Barberini, 1848<sup>36)</sup>

## (2) インノチェンツィオ10世によって建設された噴水

もともとナヴォーナ広場には、1570年の会合により2基の噴水設置が決定していた<sup>37)</sup>。広場の南側には、1574年にデッラ・ポルタによって制作された水盤と4体のトリトンと4個の仮面が交互に設置されていた噴水があった(図-14)。インノチェンツィオ10世(在位1644-1655)は、既存の噴水を造り替えて、新たに四大河の噴水 [No.19,20] とモロの噴水 [No.21] を建設した。

インノチェンツィオ10世は、名家パンフィーリ家出身の教皇であり、ナヴォーナ広場に面したパンフィーリニ宮殿の前にあるデッラ・ポルタの噴水の更新をベルニーニに依頼した。1652年ベルニーニは水盤の中央に設置する彫刻を制作するが、教皇が小さすぎるとして満足せず、撤去された。このため、1653年に新たに巨大なモロの彫刻を作成し、1655年再度中央に設置したが、製作途中にモロの彫刻は既存の水盤には大きすぎるとして、1654年教皇の命令によって、水盤の周りに新たな水受けが設置された。ベルニーニは、バルカッチャ(図-6)と同様の方法で、市民がマスクから取水できるように水盤 [S-0] に足場が設けられた<sup>38)</sup>(図-15)。

以上のように噴水を建設する際、および更新される際ですえ、用と美を希求する慣習は、制度上の約束によって保証されていた。従って、芸術性の高い装飾噴水でも

制度に従う必要があった。これは、バロック時代の美の巨匠であるベルニーニの噴水であっても実用性を離れることなく制作されたことが証左となる。噴水の美への希求は、個人の裁量と意志に任せられたが、同時に公共の利用は必ず担保される制度上の仕組みがあった。

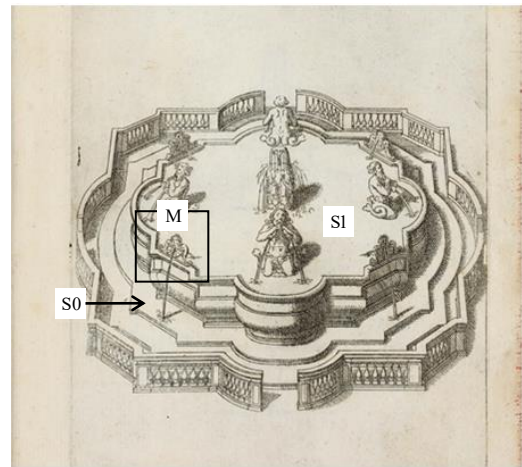


図-14 ナヴォーナ広場のモロの彫刻が設置される以前の噴水 [No.21 資料 b]

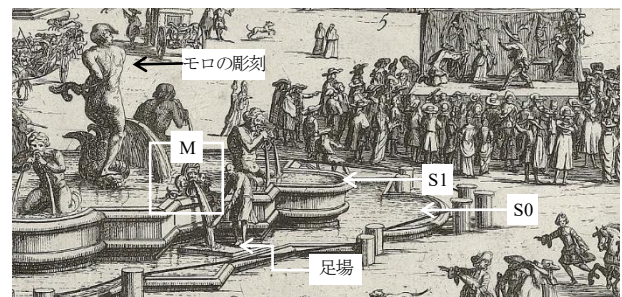


図-15 ナヴォーナ広場のモロの泉から帽子で水をくむ男 [No.21 資料 d の一部]

Piazza Navona te Rome Piazza Navona Antico Circo Agonale dell' Imperatore Severo Alessandro Edificata sv le Rvine di Esso (.) の一部<sup>39)</sup>

## 5. まとめ

本研究では、16~17世紀ローマ水道復興期に造られたローマ市内の公共噴水に着目し、(実)用と美としての噴水を、基本構成である吐水口と水盤の構成と配置および制度の視点から明らかにした。その結果、以下が明らかとなった。

研究対象とした噴水 29 基のうち、水盤の高さを実測すると、水盤高さは平均 900mm 程度で水汲みに即した高さであった。実測可能な噴水 20 基のうち 2 基を除く 9 割の噴水の水盤 (S-1) 高さが 1250mm 以内であり、雑水としての水汲みに即す。なお、No.25 のロタンダ広場は、基準値を超えるものの、足場を利用し水盤の高さを調整する工夫が見られた。また、地盤面にある水盤 [S-0] 基壇の変更と設置場所の変更がある 1 基を除外する

と 250mm 以内であり、これも水汲みに適した高さと言える。

仮面付きの吐水口を飲水としての給水が可能な噴水とすると、噴水 29 基のうち 19 基あり、6 割以上の噴水において、飲水としての取水が可能であったと言える。

これに加えて、水盤の活用を探ると、吐水口専用の小型の水盤 [SS] が水盤 [S-1] と複合的に設置される噴水が 2 基あり、吐水口がない噴水 [F1] に吐水口と水盤のある [F2] が設置される噴水が 3 基あり、広場内に設置された F2 は 3 基ある。F1 と F2 の組み合わせによって 25 基の噴水が飲水も可能な噴水になることが明らかとなった。

また、実用に傾くだけでなく、美への希求が可能にな

ったひとつの要因は、古代ローマの法律を援用した中世の教皇による「水を邸宅に引き込む代わりに、自費で公共のための噴水を建設する」制度が遠因する。この制度は、表向きはローマの再建事業であるが、内実は、教皇の世俗化と政治的腐敗、聖職者や富裕層の覇権争い、教皇庁の財政難などに依るものであった。実際はともかく、噴水を建設する際、および更新される際でさえ、個人の裁量と意志に任せられた美への希求と用途への奉仕が担保される役割を果たした。

以上から、16-17 世紀に造られた公共噴水は、装飾的でありながらも、実用性のある公共施設として今もなおローマに息づく。

表-2 16 - 17 世紀に造られた公共噴水利用

頁 (No.)	呼称	高さによる 水汲み機能		(1)飲水	(2)雑水				複数 機能
		水盤 (S1) 高さ (m)	水盤 (S0) 高さ (m)	仮面 (種類)	噴水 (F1)		噴水 (F2)		
					水盤 (S)	小型水盤 (SS)	柵内外	広場内	
3	サンピエトロ広場	0.9						角型オベ	2
4	ベルヴェデーレ宮殿中庭	未							未
5	ヴァチカン宮殿	未							未
6	モンテ・カヴァッロ広場	0.6							1
7	4つの噴水	1.0		丘	SI				2
8	ヴィミナーレ山の噴水	1.1		ライオン	SI			角型オベ	3
9	サンタ・マリア・マッジョーレ広場	1.0		ドラゴン	SI	SS1		角型オベ	4
10	聖ヨハネ広場	0.8		貝/イルカ	SI				2
11/12	アクア・パオラの噴水	0.5		ドラゴン	SI				2
13	サンピエトロインモンテリオ	廃		ライオン/鷲	SI				(廃)
14	ポポロ広場	0.6		ドラゴン→ライオン	SI			角型オベ	3
15	トリニタデモンティ広場の噴水		0.2	パテラ	S0 足場			角型 (貝)	3
16	バルベリーニ広場	0.6							2
17	カンピドリーオ広場	1.3							0
18	カンピドリーオ下広場		0.5	(顔)	S0				2
19/20	ナヴォーナ広場 (四大河)	0.5						角型オベ	2
1-21	ナヴォーナ広場(モロ)		0.2	顔	S0 足場				3
1-22	シスト橋	0.9		ドラゴン・ライオン	SI				2
1-23	マッテイ広場		0.1	イルカ/貝	S0			角型	2
1-24	コロナ広場	1.1						角型円柱	2
1-25	ロタンダ広場	1.3		(顔)	SI 足場			角型オベ	2(3)足場
1-26	ファルネーゼ広場	1.2							1
1-27	ブラッチャーノ侯爵邸中庭	未		顔	SI		半円		未
1-28	ジュデア広場	1.1		(顔)	(SI)				1?
1-29	モンテシトリオ広場	廃		(ドラゴン)	SI 地下				(廃)
1-30	スコッサカヴァッリ広場	0.9							1
1-31	マドンナ・デイ・モンティ広場	1.1		顔	SI	SS1			2
1-32	マリアイントランスヴェレ広場	1.1		貝	SI			角型	2
1-33	アセトーサの泉	0.3		丘	SI 地下足場				2
		平均 0.9m	平均 0.3m	19	SI=15, S0=4	2	4	8 (9)	

【補注】

[1] 日本では、一般に「噴水」を池や泉水に水を噴出させる人工的な装置を意味するが、欧米では、「泉」は、spring と fountain の両方の意味を兼ねる。本研究では、イタリア

語の fontane を「噴水」と称するが、名称として使用する場合は「泉」とする。

[2] 第 1 部と第 2 部の風景の風景は、ジョヴァンニ・パッテイスタ・ファルダ第 3 部と第 4 部の風景は、ジョヴァンニ・フランチェスコ・ヴェントゥリーニによって摺られ、

1691年以降にジョヴァンニ・ジャコモ・デ・ロッシによって出版された。

- [3] 版画プレートは31枚であるが、そのうち2枚は同じ噴水を描いたものであるため29種の噴水を対象とする。
- [4] 版画プレートは42枚の場合もあり、図書により版面の順番は異なる。なお、77枚から構成される図書もある。本研究では、Parasacchi, D. *Raccolta Delle Principali Fontane Di Roma*. 1647.を使用する。
- [5] 古代ギリシャの数学者ヘロン著の『気体装置』においても流水口には仮面が使用される。ポンペイでは、39期の噴水において、流水口に仮面が使用される。
- [6] 例えば、シスト5世(在位1585-1590)の紋章はライオン、パウロ5世(在位1605-1621)鷲とドラゴン、ウルバノ8世(在位1623-1644)の紋章は蜂、アレクサンドロ7世(在位1655-1667)の紋章は丘と星に象徴される。
- [7] チプリアーニによると、1586-1822年までに建てられたオペリスクは、12本であると紹介される。コロナ広場の記念柱を入れると7本となる。
- [8] 以下、噴水の刻印原文:  
"Urbanus VIII Pontifex Maximus / Fonti ad publicum urbis ornamentum Exstructo / Singulorum usibus seorsim commoditate hac / Consuluit / Anno MDCXLIV Pont. XXI"

## 参考文献

- 1) Pulvers, Marvin. *Roman Fountains: 2000 Fountains in Rome: A Complete Collection*. "L'Erma" di Bretschneider, 2002.
- 2) 今井宏, 古代のローマ水道: フロンティヌスの『水道書』とその世界. 原書房, 1987. p.44
- 3) 鯖田豊之: 水道の思想-都市と水の文化誌. 中公新書. Vol. 1297: 中央公論社, 1996. p.44
- 4) 吉田享二: 日時計とファウンテン. 造園叢書. 雄山閣, 1928. p.103
- 5) D'Onofrio, Cesare: *Le Fontane Di Roma. Studi E Testi Per La Storia Della Città Di Roma*. 3a interamente riv. e ampliata ed. Vol. 7: Romana società: Distribuzione e vendita, "Studio d'autore" libreria, 1986.
- 6) Morton, H.V.: *The Fountains of Rome*. Macmillan, 1966.
- 7) 佐藤昌: 噴水史研究会 - 噴水史研究. インタラクシオン/環境緑化新聞社, 1999.
- 8) 佐々木学: 1584年から1658年にかけてのマッテイー広場の噴水の変様. 日本建築学会計画系論文集 71, no. 606 (2006): 93-98, 2006
- 9) 佐々木学: ジャコモ・デッラ・ポルタの噴水に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 72, no. 622 (2007): 233-38, 2007
- 10) 佐々木学: ジャン・ロレーンツォ・ベルニーニによるトレーヴィの泉の改築に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 71, no. 601 (2006): 127-32, 2006
- 11) 岡田昌彰, 岡島一郎: 金沢市末浄水場の空間構成とその利用に関する研究, 土木史研究論文集 23 (2004): 151-56, 2004
- 12) Parasacchi, Domenico, Matteo Gregorio de Rossi, Francesco Corduba, Giovanni Maggi, and Pierre Miotte: *Raccolta Delle Principali Fontane Dell'incitta Città Di Roma. In Roma: Appresso Gio. Batta. de Rossin [sic] Pa. Nauona*, 1647. //catalog.hathitrust.org/Record/100828334, 2024年4月
- 13) <https://catalogo.beniculturali.it/detail/HistoricOrArtisticProperty/0900476833>, 2024年4月
- 14) Cipriani, Giovanni Battista, and Tigerman, Stanley: *Architecture of Rome: A Nineteenth-Century Itinerary*/by Giovanni Battista Cipriani; Introduction by Stanley Tigerman. New York: Rizzoli, 1986. Print.
- 15) Cipriani, Giovanni Battista. *Degli Edificj Antichi e Moderni Di Roma: Vedute in Contorno / Disegnate Ed Incise Da Gio. Batt. Cipriani*. Roma: [sn.], 1817. Print.
- 16) Letarouilly, Paul Marie: *Édifices de Rome moderne, ou, Recueil des palais, maisons, églises, couvents, et autres monuments publics et particuliers les plus remarquables de la ville de Rome*. Reprint. t. 1 & 2 Originally published: Paris: Typographie de Firmin Didot frères, 1840-1850; t. 3 originally published: Paris: Bance, 1857 t. 1: 付(別冊 39p; 23x28cm): 解説「ルタルーイ近代ローマ建築」長尾重武監修
- 17) Letarouilly, Paul Marie, and Ingrid Rowland. *The Vatican and Saint Peter's Basilica of Rome*. Princeton Architectural Press, Institute of Classical Architecture & Classical America, School of Architecture at the University of Notre Dame, 2010
- 18) 竹山博英: ローマの泉の物語. 集英社新書. Vol. 0255D: 集英社, 2004. p.138
- 19) Green, R.L.: *Two Satyr Plays: Euripides' Cyclops and Sophocles' Ichneutai*. Penguin Books, 1957. p.10
- 20) Gau, F. Chrétien 1789-1853, et al. *Les Ruines De Pompéi*. Paris: Firmin Didot, 1824. 1838. <https://hdl.handle.net/2027/gri.ark:/13960/t8tb67g9p>, 2024年4月
- 21) Gau, F. Chrétien 1789-1853, et al. *Les Ruines De Pompéi*. Paris: Firmin Didot, 1824. 1838. <https://hdl.handle.net/2027/gri.ark:/13960/t8tb67g9p>, 2024年4月
- 22) 前掲『水道書』p.63,
- 23) 前掲『水道書』p.59
- 24) 前掲『水道書』p.63
- 25) 小原二郎, デザイナーのための人体・動作寸法図集. 彰国社, pp.138-139, 1985.
- 26) 小原二郎, 建築・室内・人間工学. 鹿島研究所出版会, p.225, 1969.
- 27) 前掲『建築・室内・人間工学』p.247
- 28) Vitruvius, Pollio, 森田慶一 [訳注]: ウィトルーウィウス建築書. 東海選書. 普及版 ed.: 東海大学出版会, p.204, 1979.
- 29) Piazza di Spagna, fontana del Bernini detta "La Barcaccia", <https://purl.stanford.edu/rp691xg0358/version/1>, 2024年4月
- 30) 前掲『水道書』p.48
- 31) 前掲『水道書』p.44
- 32) 前掲『ウィトルーウィウス建築書』p.225
- 33) 前掲『水道書』p.59
- 34) 前掲『*Le Fontane Di Roma*』p.33
- 35) 前掲『*Le Fontane Di Roma*』p.62
- 36) Luigi Rossini, View of the Piazza Barberini, 1848., Wikimedia Commons, <https://picryl.com/media/luigi-rossini-piazza-barberini-9f37c2>, 2024年4月
- 37) 前掲『*Le Fontane Di Roma*』p.63
- 38) 前掲『*Le Fontane Di Roma*』p.76
- 39) Gomar Wouters, Domenico De Rossi [Publisher]: *View of the Piazza Navona, Rome, with the church of St Agnese at left and Bernini's fountain in the middle*, 1693 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/414393>, 2024年4月